

日本戦略研究フォーラム（JFSS）

特別顧問 岩田清文

理 事 岡部俊哉

## 「漢光 42 号実兵演習」・「都市強靱性（防空）演習」研修報告

### 1 前言

この度、国家安全会議及び国防部のご厚意により、8月7日（金）高雄市において実施された「漢光 42 号実兵（実戦の意）演習」及び「都市強靱性（防空）演習」を研修する機会が与えられた。

本稿はその研修結果を報告するものである。

### 2 「漢光 42 号実兵演習」及び「都市強靱性（防空）演習」について

#### (1) 「漢光 42 号実兵演習」の概要【現地報道による】

台湾軍主催の大規模軍事演習「漢光 42 号」の実動演習が 8 月 5 日（水）から 14 日（金）までの間、実施された。台湾の報道機関によれば、2023 年の「漢光 39 号」以降、中華民国軍は「火力誇示」や「年次デモンストレーション演習」から徐々に脱却し、本「漢光 42 号」においては組織改革と訓練に重点を置く、台本のないシナリオによる実戦的な演習になった。

本演習は『マルチドメイン拒否、強靱性防衛』、作戦能力の向上に焦点を当てたもので、人力動員演習「同心 36 号」を組み合わせ、2 個旅団による「全旅団動員・戦力回復効率」、「全社会防衛強靱性」、「突発的状況への対応・指揮対応（分散型の指揮統制、ミッションコマンド）」、「新たな交戦規則（ROE）」の検証などを主要演練項目としている。



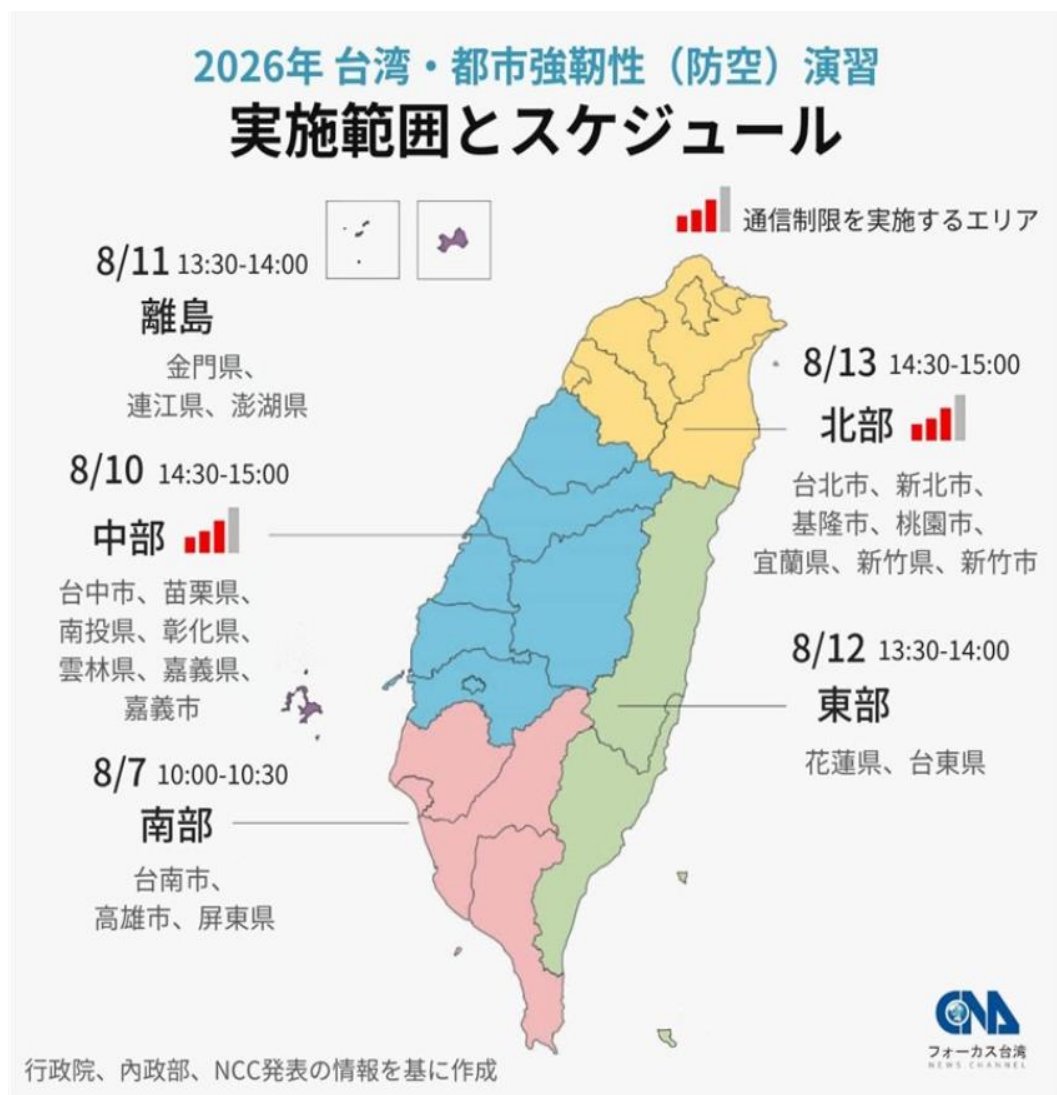
出典：報道写真より



出典：報道写真より

(2) 「都市強靱化（防空）演習」の概要【現地報道による】

防衛省 大臣官房 広報課 防衛白書事務室



齊藤 翼

出典：2026 年都市強靱性（防空）演習実施範囲とスケジュール（中央社作成）

ア 「漢光 42 号」に統合された形で、社会全体を対象に「全社会防衛強靱性」を演練するもので、国防部及びその下部組織である全民防衛動員署が主管するとともに、国防安全会議や行政院（内閣）などの方針のもと、連携した各地方自治体（県・市）が主催して防空演習、災害救援訓練等を実施した。

## イ 防空演習

8月7日と10～13日にかけて、南部、中部、離島、東部、北部の順で各地域ごとに実施された。各地域で30分間行われ、防空警報に加え、交通規制が敷かれ、走行中の車は路肩に停車、通行人は屋内や地下に退避する等、警察や憲兵などの指示に従うことが求められた。

## ウ モバイル通信速度低下訓練

8月10日及び13日、中部地区及び北部地区においては「防空演習」に加えて、初の大規模な「モバイル通信速度低下訓練」が実施された。

報道によると、今回の訓練は通信を遮断するものではなく、「通信速度の低下」であり、音声通話、ショートメッセージサービス（SMS）、テキストメッセージなどの基本的な通信は通常どおり利用できる。一方で通信速度の低下により、動画配信、ビデオ通話、モバイル決済、クラウドによる同期化など、大容量通信を必要とするサービスに影響を及ぼすものであった。また本訓練は、有事における通信環境が制約された状況下における政府の対応能力を検証するとともに、国民に対して自らも多様な通信手段によるバックアップ体制を備えておくことの重要性を周知し、レジリエンス意識の向上を図る狙いがある。

## 3 高雄市における「漢光 42 号実兵演習」研修

国軍左榮総医院が実施した「軍・政府・民間医療統合による負傷者移送および医療 キャパシティー移転訓練」

### (1) 訓練の構成・狙い

本訓練は、国防部軍備副部長（後方支援）鐘樹明大将の統裁のもと、国防部軍医局が主催し、国軍病院及び民間病院が演練した。

前線から高雄市所在の国軍病院の左榮総医院に後送されて来る負傷者を同院から複数の民間病院に移送して、兵士の身体・生命を守るとともに、大量の負傷者発生時に備え左榮総医院が対応するためのキャパシティーを常時確保しておくことが狙い。

### (2) 本訓練の概要

高雄市に所在する義大医療財団法人 義大医院は、有事には同院のワンフロア（12階）を一般患者と区分した戦傷者受け入れ専門病棟として50床確保できる様になっている。

左榮総医院から負傷者移送の依頼を受けた義大医院では、事前に連絡員から症状等患者の情報を入手するとともに、受け入れ態勢を整えて待機、患者到着とともに速やかに申し受けて、治療を開始する。

本来は複数の医院に移送するが、本訓練では義大医院のみが参加した。



出典：筆者撮影

### (3) 研修の概要

ア 多くの台湾軍人、医療関係者、オーストラリア・ドイツ等からの研修者に交じって参加した。日本からの研修者として紹介されるとともに、特に台湾側からは大いに歓迎された。

#### イ 質疑応答

訓練終了直後、現場において参加者に対し統裁官鐘樹明大将自ら質疑を持ち掛けられたことから、日側（岡部）から軍民連携の際の戦傷者の移送とその受け入れにおける責任の所在について質問した。負傷者のトリアージとその結果に基づく民間病院の選定と搬入までは国軍医院の責任であり、負傷者を受け入れて以降の患者としての治療は受け入れた民間医院の責任となる旨の回答を鐘樹明大将から直接得た。

#### ウ 行動後検討（AAR）への参加

左から杜敏宇左榮総医院長、杜元坤義大医院長、鐘樹明国防部軍備副部長(統裁官)、

林飛帆国家安全會議副秘書長、陳元皓国防部軍医局長



出典：筆者撮影

（ア）訓練終了後に実施された、統裁官鐘樹明大将主催の AAR に参加でき、日本国自衛隊の元将官として発言する機会が与えられた。

岩田から、本訓練を高く評価するとともに、台湾との比較において、我が国の南西諸島防衛における治療後送・特に海上・航空輸送の困難性について言及したところ、出席者からの理解を得た。

（イ）杜元坤義大医院長の発言

- 本演習において我が医院を選定いただき、誠に光栄である。
- 国軍病院としては、トリアージに基づき、それぞれの症状に応じて移送する

病院を決定すべきである。また、受け入れ病院の搬入口については、一般の患者と軍からの戦傷者を区別すべきである。

- 我々は同じくユニフォーム（軍服と白衣）を着る者である。軍は国家を守り、医者国民の命を守る。互いに国を守っている。

我々は 12 階を空けておく。

(ウ) 国防部軍医局 衛勤保健処科長からの申し出

自衛隊と台湾軍の衛生に関する連携は非常に重要であり、進めなければならない。そのためには、現在の日台の消防交流を基礎として、将来的には自衛隊との交流・連携まで拡大することを検討していきたい。

#### 4 高雄市における「都市強靱性（防空）演習」研修

高雄市消防局における受付



出典：筆者撮影

##### (1) 防空演習



09:45 演習予告



10:00 演習防空警報



10:30 演習防空警報解除

出典：筆者スマホより

研修団の一員として高雄榮民總醫院の地下に移動中であり、高雄市内の防空演習を直接視認することはできなかった。一方で、各人のスマホには高雄市からの演習警報が送信され、高雄市挙げて防空演習が実施されていることは認識できた。

報道によれば、演習の時間帯（30 分間）は通行人と車両の誘導、交通規制などが行われ、通行人は屋内に入り、走行中の車は路肩に停車して警察や憲兵などの指示に従うことが求められていたとのことである。

(2) 高雄榮民總醫院（公営）による「地下代替医療施設移転訓練」



出典：筆者撮影

ア 研修概要

公営の高雄榮民總醫院において、同病院の地下1階駐車場で実施された災害状況下における「地下代替医療施設移転訓練」の展示・説明を研修した。

本訓練は高雄市が主催して実施したもので、蕭美琴副総統、林飛帆国家安全會議副秘書長等の現地視察、更には蕭副総統が各部署において熱心に質問される態度を鑑みるに、災害想定としながらも有事を念頭に置いた重視する訓練であることは明らかであった。

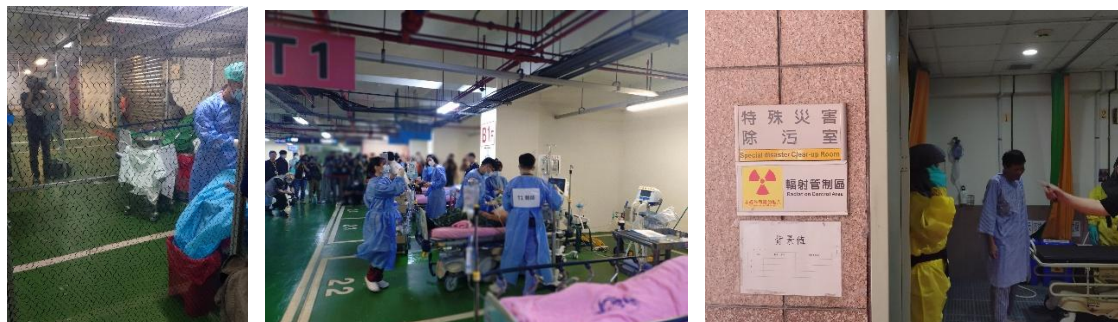


出典：筆者撮影

## イ 医療態勢の確立

(ア) 発災（下令）後、1 時間以内に HICS（Hospital Incident Command system：災害時の病院管理運営システム）による指揮態勢を、48 時間以内に地下代替医療施設移転を完了して、医療態勢を確立・継続するものである。

(イ) 解放した地下駐車場のスペースを最大限活用して、患者受け入れ～トリアージ～症状別の治療、薬局等導線を確保した機能的な医療態勢が確立されているものと思料する。



出典：筆者撮影

## 4 結言

8 月 7 日の僅か半日の研修であったが、得るものが多い誠に有意義な研修であった。

台湾海峡情勢の緊張を受け、訓練のための訓練から脱却を図り、実戦に即した訓練を国家を挙げて追求しようとする台湾の姿勢が処々に垣間見られた。

特に 30 分間とは言え、社会生活・経済活動等に大きく影響する防空警報状況付与と対応は元より、例えば平日の日中という時間帯を使って、病院が一般の実患者の診察、治療、入院等を継続しつつ、積極的に演習に参加するという、プロとしての誇りと国防意識の高さに感激した。

杜元坤義大医院長の「我々は同じくユニフォーム（軍服と白衣）を着る者である。軍は国家を守り、医者国民の命を守る。互いに国を守っている」との言葉が全てを物語っている。

国土防衛作戦においては、軍・公・民の統合は不可欠であり、その一部としての負傷者の移送や代替医療施設移転活動であっても、我が国としては大いに参考にすべきものであり、漢光演習は我が国にとっても正に宝の山である。

それにも関わらず、日本の官公庁や民間からの研修はほとんど見当たらず、この度の医療関係の重要演習についても、日本からは我々 2 人（それも戦闘職種出身）だけという、情けなさであった。

漢光演習そのものは秘匿性が高く、かつシナリオなしの状況では、研修の受け入れは叶わないであろうが、付随して行われる国家を挙げた各種演習は、事前に計画が明らかになっており、日本国家としての危機管理を学ぶ絶好の機会である。来年以降、国・地方自治体・民間団体等から各種オブザーバーが派遣されることを大いに期待したい。

また、自衛隊としても台湾軍からは、平時からの連絡調整メカニズムの構築が望まれているところである。困難な状況であるが、国防部軍医局の科長からの申し出にもあったように、既存の様々な日台交流の枠組みをより強固なものとしていただき、それを基礎に将来的にミリタリーレベルまで到達させたいものである。

一方で後方支援特に衛生（戦傷者の治療・後送等）に関しては、人道的な支援といった観点・枠組みからのアプローチで、調整メカニズム構築に風穴を明けることはできないだろうか。

我が国の防衛・安全保障に関し、台湾に限らず他国から貪欲に学び、知恵を絞り、形振りかまわず突き進まねばならない危急存亡の秋（とき）がもう間近に来ているのではないか。悠長にしている時間はない。

最後に、本研修に関する情報を提供するとともに、現地においても我々を温かく受け入れていただいた、林飛帆国家安全会議副秘書長に心から御礼申し上げる。